過去の試験問題の入手をご希望の方は書店にてお買い求めください。

平成 28 年度日本語教育能力検定試験

試験Ⅰ　問題冊子

（抜粋）

問題 4　次の文章を読み，下の問い（問１～５）に答えよ。

コミュニケーション能力の育成を重視した教授理念に，コミュニカティブ・アプローチ[A]がある。指導にあたっては，現実のコミュニケーション場面に基づいた教材を使用し，実践的な言語活動を行う[B]。

タスク（課題）を達成することを主眼としたタスク中心の教授法[C]もコミュニカティブ・アプローチの考え方が基盤となっている。学習者は，学習した言語表現だけでなく，様々なストラテジー[D]を駆使してタスクを遂行する。また，タスク中心の教授法に近いものとして内容重視の教授法がある。近年，教科内容と言語を統合して学習する中で，学習者に様々な認知活動を促す内容言語統合型学習（CLIL）[E]が注目されている。

問１　文章中の下線部Ａ「コミュニカティブ・アプローチ」の背景となる考え方の一つとして最も適当なものを，次の１～４の中から一つ選べ。

1　学習の初期段階では理解優先とし，目標言語で発言することへの心理的圧迫を避ける。

2　目標言語の音声や文法を習慣づけることで，母語の干渉をなくすことができる。

3　言語学習は単なる習慣形成ではなく，学習者自らが帰納的に文法規則を見つけるものである。

4　会話の中で意味交渉が生じることによって，言語習得が促進される。

（正答４）

過去の試験問題の入手をご希望の方は書店にてお買い求めください。

平成 28 年度日本語教育能力検定試験

試験Ⅱ　問題冊子

（抜粋）

問題 2

これから，教師が，学習者の発音上，問題がある箇所を言い直します。発音上の問題として最も適当なものを，問題冊子の選択肢 a，b，c，d の中から一つ選んでください。

1 番

a　アクセントの下がり目と句末・文末イントネーション

b　拍の長さとアクセントの下がり目

c　アクセントの下がり目

d　拍の長さ

１番の音声（クリックすると音声が聞けます。）

（正答 b）

過去の試験問題の入手をご希望の方は書店にてお買い求めください。

平成 28 年度日本語教育能力検定試験

試験Ⅲ　問題冊子

（抜粋）

問題 9　次の文章を読み，下の問い（問１～５）に答えよ。

異文化に接触した際のスムーズな適応のための異文化トレーニング[A]は，1960年代のアメリカにその起源を発し，目的や内容に応じて，様々な方法が用いられてきた。

「認知レベル」のトレーニングは，特定の文化に関するものと文化一般に関するものとの２種類に大別される。前者では，特定の文化における適切な対人関係のルールや，社会規範，人種や宗教等についての知識や情報を得る。後者では，偏見や自文化中心主義[B]など，異文化コミュニケーションにおいて生じやすい問題について学ぶ。

「情動レベル」のトレーニングでは，異文化に直面したときの自らの感情を理解し，それを制御するために，心理テスト，ロールプレイ，異文化シミュレーションゲーム[C]等の活動が用いられる。こうした活動においては，参加者の気づきを促すために，訓練されたファシリテーター[D]の存在が欠かせない。

「認知レベル」「情動レベル」のトレーニングを通して異文化接触の不安が軽減されると，積極的に異文化を理解し，コミュニケーション活動に参加する「行動レベル」での変化が期待される。自分とは異なる価値観に遭遇した際に，［(ア)］という措置を取れるのも，こうした変化の一例である。

問１　文章中の下線部A「異文化トレーニング」に関する記述として最も適当なものを，次の１～４の中から一つ選べ。

1　参加者それぞれの文化的背景を考慮して，プログラム内容を構築する。

2　体験型のトレーニングが中心で，講義形式の学習は行わない。

3　渡航前の準備として行うもので，滞在中や帰国後に行うことはない。

4　過去に異文化体験をしたことのある者は，トレーニングの対象外とする。

（正答１）